

平成 29 年 11 月 30 日	<b>病虫害発生予報</b> <b>12 月号</b>	茨城県病虫害防除所 茨城県植物防疫協会
----------------------	--------------------------------	------------------------

今年の防除作業を振り返り、翌年に向けて防除日誌を準備する等、  
よりよい防除へつなげましょう！

＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病虫害】	
イチゴ：うどんこ病，ハダニ類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
【その他の病虫害】	
促成ピーマン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
【防除所レポート】	
平成 29 年産大豆子実の主要病虫害による被害状況について・・・・・・・・	3
II. 今月の気象予報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
<p>最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの 「農薬登録情報提供システム」(<a href="http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm">http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm</a>) で 確認することができます。</p>	
<p>詳しくは、病虫害防除所へお問い合わせ下さい。 茨城県病虫害防除所      Tel : 0299-45-8200 予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。 ホームページアドレス <a href="http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/">http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/</a></p>	

# I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

## イチゴ

### 1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや少ない	県下全域

[予報の根拠]

- ① 11月下旬現在、発病株率（本年値 3.2%、平年値 10.5%）、発生地点率（本年値 30%、平年値 43%）ともに平年並～やや低い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。  
② 罹病部はできるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。  
③ 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRAC コードもしくは系統の異なる薬剤を用いてローテーション散布する。  
④ 発病の予防には、硫黄くん煙剤の処理が省力的で有効である。  
⑤ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。  
⑥ 薬剤によっては、果実に汚れが付くものもあるので、十分注意する。

### 2. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや少ない	県下全域

[予報の根拠]

- ① 11月下旬現在、被害株率（本年値 11.6%、平年値 16.9%）、発生地点率（本年値 40%、平年値 55%）ともに平年並～やや低い。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。  
② 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードもしくは系統の異なる薬剤を用いてローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。  
③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
促成ピーマン	うどんこ病	発生量：やや少ない	11月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。ただし，発生の多い圃場もあるので注意する。
	アザミウマ類	発生量：やや多い	11月下旬現在，平年よりやや多い発生である。

## 平成 29 年産大豆子実の主要病害虫による被害状況について

平成 29 年産大豆子実の主要病害虫による被害状況と防除対策をまとめました。次作に向けた対応の参考にしてください。

## 〔被害状況〕

病害では、紫斑病およびべと病の被害粒率、発生地点率がともに平年より高く、虫害では、吸実性カメムシ類の被害粒率が平年よりやや高く、発生地点率は平年並～やや高くなりました(表)。本年は、8月から10月にかけて前線や台風、湿った空気の影響などで雨の日が多く、病害の発生を助長する条件が続いたと考えられます。また、吸実性カメムシ類による被害の増加は、莢伸長期～子実肥大期の発生が平年よりやや多い～多かったためと考えられます。

表 平成 29 年産大豆子実の主要病害虫による被害状況

病害虫	被害粒率 (%)			発生地点率 (%)		
	本年	平年 <sup>1)</sup>	順位 <sup>2)</sup>	本年	平年	順位
紫斑病	9.1	0.7	1	100	45	1
べと病	19.9	1.5	1	100	48	1
吸実性カメムシ類	3.9	2.8	3	92	87	4-6

1) 平年：平成 19～28 年の値の平均値

2) 順位：本年を含む過去 11 年間における本年値の順位

〔調査圃場〕 県内 13 地点の大豆圃場（里のほほえみ 6 圃場、納豆小粒 4 圃場、タチナガハ 3 圃場）

〔調査方法〕 10 株（/圃場）の上位 20 莢程度（合計 200 莢程度）を採取し、子実の被害を目視で調査した。

〔採取時期〕 平成 29 年 10 月第 4 半旬

## 〔防除対策〕

## ＜紫斑病＞

- ① 被害残渣は深くすき込む等適切に処分し、被害が多発した圃場では連作を避ける。
- ② 種子更新を行う。
- ③ 防除適期は開花期の 20 日後頃である。開花期から成熟期までに連続した降雨がある場合は、開花期の 30 日後に追加防除を行う。
- ④ 収穫が遅れると発生が多くなるので、適期に収穫する。

## ＜べと病＞

- ① 被害残渣は深くすき込む等適切に処分し、被害が多発した圃場では連作を避ける。
- ② 種子更新を行う。
- ③ 密植を避け、風通しを良くする。
- ④ 発病初期からの薬剤防除を徹底する。なお、病害虫防除所の調査では、「納豆小粒」、「里のほほえみ」は、「タチナガハ」に比べて発病しやすい傾向にある。

## ＜吸実性カメムシ類＞

- ① 薬剤防除は莢伸長期以降、発生に応じて 7～10 日ごとに複数回行う。
- ② 幼虫も子実を加害しながら成長するため、幼虫の発生状況にも注意する。

## Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 11月25日から12月24日)

気象庁(11月23日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	40	30	30
	降水量	関東甲信全域	20	40	40
	日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<1週目の予報> 11月25日(土曜日)から12月1日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

<2週目の予報> 12月2日(土曜日)から12月8日(金曜日)

気温 関東甲信地方 低い確率50%

<3週目から4週目の予報> 12月9日(土曜日)から12月22日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率40%

### 農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、異なる作用機構分類\* (FRACコード、IRACコード)の薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(平成29年4月27日発表)の防除所レポート参照

- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。